

| | |
|------------------|---|
| Title | エスニック・マイノリティの位置づけをめぐる政治： スチュアート・ホールによるマイノリティ表象についての分析を手掛かりとして |
| Sub Title | Examining ethnic minority relations and politics: a cultural studies approach |
| Author | 新嶋, 良恵(Nijijima, Yoshie) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.139- 154 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | <p>Analyzing the articulation or re-articulation processes of discourse between social forces, especially concerning the representation of ethnic identity, is necessary if one wishes to pursue further theoretical development in ethnic studies. In many studies of ethnic groups, a systematic view of minority representation and its correlation with neo-conservatism are overlooked due to a convergence with actual racist experiences of minorities.</p> <p>According to Stuart Hall, mass media is an arena in which different social forces struggle over meaning. Researchers who consider mass media discourse formation as a process in which the power of discourse is excised and signification occurs by transforming the way identities are represented and connected, differ from others who simply address the disparity of power between actors by describing how the privileged "sujet de l'énonciation" creates the authorized field of conversation.</p> <p>By examining the process of discourse formation, we will be able to see identity as generated in a form that is always connected to representation, i.e., the "subjected self." Because identity is a suture point of discourse practice, inviting specific discourse on the socialized subject and the process of constructing the self (Hall 1996: 5; 2001: 15), it is not inevitable articulation, as unification is sustained under certain circumstances. Hall, a leader of the theory of Cultural Studies, pioneered the study of mass communication through a neo-Marxist lens and set his focus on this articulation process. His study questioned why and how some specific articulations are accepted as unswerving, whereas others are not. Today, the articulation of identity cannot be separated from its representation in mass media. This study discusses the necessity to have an approach of Cultural studies, which examines the problem of identity in inter-discursive manner. Confronting the question of the relative power and distribution of different regimes of truth may lead to the question of representation of identity. Representation of identity changes through the process of articulation, by socially and with intervention of the media, identities acquiring a different signification. This is what Stuart Hall called "the ideological effect" which maintains power in the social order.</p> |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0139 |

societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エスニック・マイノリティの位置づけをめぐる政治

—スチュアート・ホールによるマイノリティ表象についての分析を手掛かりとして

Examining Ethnic Minority Relations and Politics

—A Cultural Studies Approach

新 嶋 良 恵*

Yoshie Nijima

Analyzing the articulation or re-articulation processes of discourse between social forces, especially concerning the representation of ethnic identity, is necessary if one wishes to pursue further theoretical development in ethnic studies. In many studies of ethnic groups, a systematic view of minority representation and its correlation with neo-conservatism are overlooked due to a convergence with actual racist experiences of minorities.

According to Stuart Hall, mass media is an arena in which different social forces struggle over meaning. Researchers who consider mass media discourse formation as a process in which the power of discourse is excised and signification occurs by transforming the way identities are represented and connected, differ from others who simply address the disparity of power between actors by describing how the privileged “*sujet de l'énonciation*” creates the authorized field of conversation.

By examining the process of discourse formation, we will be able to see identity as generated in a form that is always connected to representation, i.e., the “subjected self.” Because identity is a suture point of discourse practice, inviting specific discourse on the socialized subject and the process of constructing the self (Hall 1996: 5; 2001: 15), it is not inevitable articulation, as unification is sustained under certain circumstances. Hall, a leader of the theory of Cultural Studies, pioneered the study of mass communication through a neo-Marxist lens and set his focus on this articulation process. His study questioned why and how some specific articulations are accepted as unswerving, whereas others are not. Today, the articulation of identity cannot be separated from its representation in mass media.

This study discusses the necessity to have an approach of Cultural studies, which examines the problem of identity in inter-discursive manner. Confronting the question of the relative power and distribution of different regimes of truth may lead to the question of representation of identity. Representation of identity changes through the process of articulation, by socially and with intervention of the media, identities acquiring a different signification. This is what Stuart Hall called “the ideo-

* 慶應義塾大学社会学研究科社会学専攻後期博士課程3年

logical effect” which maintains power in the social order.

キーワード: エスニック・スタディーズ, アジア系, メディア表象, 言説編成, スチュアート・ホール

はじめに

アメリカ社会では人種・エスニックといった区分は公的な文書や政策にも採用されている。白人, 黒人, ラティーノ, アジア系, ネイティブ・アメリカンという人々を分節化する主な分類枠組みは, アメリカ社会において, そして政治的なレベルにおいても頻繁に使用され, そうした分類に基づいて政策——たとえばアフターマティブ・アクション¹など——が考案/実施されている。ではこうして人種・エスニックという分類枠組みで区分された集団同士の関係はどのようなものなのだろうか。その点を考察するうえでの先行モデルとして, 「エスニック間継承モデル」や「エスニック間競争モデル」がある。しかしこれらは, アメリカにおけるエスニック・スタディーズの中で, 主に白人と黒人という二つのグループ間での関係について観察する際に多様に用いられたモデルである。アジアからの移民及びその子孫についての研究はそれらに比べて数が少ないうえに, 従来の移民に関する分析アプローチでは, 移民達の同化の方向性やその過程に研究の重心が置かれ, アジア系の人々はホスト文化である白人中流文化への同化にほとんど達成したかのように論じられてきた。その点をエスニック・スタディーズの研究者 Joe R. Feagin は, そうした見方は楽観的でアジア系の人々が現代において経験している差別に満ちた現実を見落としていると批判する (Chou, Feagin 2008)。また, Feagin はアジア系の人々に対する好意的表象は白人の視点から形成された「ホワイト・フレーム (White frame)」実践の産物であるにすぎないことを指摘した。80年代の新たな移民の波を経たのちの西海岸という多種多様なエスニックが入り混じる状況を分析するうえでは, 修正, または新たなモデルを考える必要がある²。

そうした試みの一つの成果として, モデル・マイノリティ論があげられる。モデル・マイノリティ論は, 特に60年代以降に構築された「優秀なアジア系」という表象と, それとは対照的に構築された「福祉政策の不当受給者」としての黒人やラテン系の人々といった表象により, 二つの集団間における闘争という図式が強化された点を指摘した。共通の「差別」という経験を持つ集団同士が, 共通の目的を生み協力に向かうことは, こうした表象によって難しくなっているとされる。本来ならば, 白人によって同じように虐げられているとして協力を模索すべき集団の間での断絶が深まり, さらには, より白人に近い社会的地位をめぐる「パイの奪い合い」ともいうべき新たなマイノリティ間闘争が開始されたといえる (Omi and Winant 1994; Davis 1993)。

この, マイノリティ表象に現れるイデオロギーの存在に焦点をあて, 「権力がせめぎあう過程」をみるというカルチュラル・スタディーズの視座は, スチュアート・ホールによって示されたものである。モデル・マイノリティ理論はイデオロギーに迫るという意味で評価できるが, ホールによるマイノリティ表象分析の深みを十分に摂取したとは言い難い。そこで本稿では, スチュアート・ホールによる経験的研究, 特に言説分析を用いたマイノリティ表象から示唆を得て, 社会構造と政治的方向づけとマイノリティ表象という3つの相互に作用しあう関係を描く上で有効な分析枠組みについてあらためて考察する。

1. 60年代以降のエスニック・マイノリティ研究

まず、アメリカ社会学において行われてきたアジア系の人々に焦点をあてた研究の有効性とその課題について考えていきたい。特に近年興隆するエスニック・スタディーズについて考察を試みる。以下では、マイノリティ集団について研究するうえで使用されてきたモデルを整理する。

1-1. エスニック間継承モデル

人種やエスニックにより分節化された集団間の関係を考察する理論モデルには、古典的なものとして継承モデル (succession model)³が挙げられるだろう。継承 (succession) とは、シカゴ学派が最初に使用した言葉で、当時、Robert ParkやMcKenzieなどは多面的な側面から社会変動の模様を描けるとしてこの表現を使用したという (A. Lee and Wood 1991: 21)。つまりこの継承モデルは、白人-黒人間で観察される現象に限った研究から提出されてきた既存の理論モデルとは異なり様々なエスニック集団間で観察される複雑な関係の考察を可能にするという目的で用いられた。Barrett LeeとPeter Woodによると、このモデルの一般的定義は「対面的状況 (physical environment) における競合から生じる (competition driven) 人々の置き換え (replacement)、または他人種・民族による不動産 (land) の使用」となっている (1991: 21)。

このモデルはそもそも、マイノリティとされるエスニック集団はホスト社会であるアメリカ文化にいずれは同化するべきであるといったアメリカニズムの観点から提出されたものだといえる。エスニックをめぐる学説を整理した関根政美著『エスニシティの政治社会学—民族紛争の制度化のために—』では、Parkはアメリカ化の観点から同化主義⁴学説を展開し、進化論的発想に影響された人間生態学派 (Human Ecology) として知られるシカゴ学派の都市社会学研究の基礎を築いた人物として位置づけられている (関根 2002: 65-66)。

シカゴ学派によって「継承」という言葉が使用された以後多くの経験的研究を経て、このモデルは段階的モデルとして参照されるようになった。もともとは、より幅広い現象について検証するために使用された継承モデルであるが、時を経てそれは黒人-白人間で見られる現象に着目するものとしての理解が一般的となった。LeeとWoodによると、継承モデルは、一般的に、白人-黒人間の関係に主に注目をした研究の中で出てきたもので、狭義のものであるという。それは「都市街における白人から黒人への早成な移り変わり」という現象を指すものである (1991: 22)。つまり、継承モデルとは、白人-黒人間で観察される、居住区、雇用等の移り変わりを観察する上で用いられる分析的理論枠組みとなるだろう。他の研究者による分析も白人と黒人の関係を検証対象としている (Duncan and Duncan 1957; Taeuber and Taeuber 1965; Wurdock 1981)。以下では、より複雑なマイノリティ集団を考える上で使用されてきたモデルについて整理し、その現代的な有効性について考えたい。

1-2. エスニック間競争モデル

アメリカでは、1960年代以降、市場・経済という視点からのエスニック集団に関する議論が活発に交わされてきた。その理由の一つは、GlazerとMoynihanが主張するように、エスニック集団が社会的上昇理論のなかで注目されてきたことがある。つまりは、自営業や小商店に従事することが、アメリカ社会で不利な立場に置かれてきた移民やマイノリティの経済的上昇の手段となると見なされたのである

(Glazer and Moynihan 1963)。また、特定の移民エスニック集団を経済的成功に導いたものとして、エスニックという紐帯により生み出される結束や特性を挙げる社会学者も存在した (Light 1972; Portes and Bach 1985)。こうした主張は、文化的分業論 (cultural division of labor approach) やエスニック集団競合論 (ethnic collective competition model) と密接に結びつくことが明らかだろう。関根の整理によると、文化的分業論の立場は同化主義や原初的特性重視論、そして社会生物学アプローチのいずれにも反対すると同時に、マルクス主義的な立場に親近性を示しながらも、階級還元論の立場にも反発し、人種・エスニシティの独自性を強調するという (関根 2002: 12)。そして、エスニック集団競合論は「拡散・競合モデル」(diffusion-competition model) あるいは「エスニック資源競合モデル」(ethnic resources competition model) などといわれ、紛争的近代化論に属すモデルだということ (ibid: 134)。この学説は、社会運動の理論として注目される「資源動員論」に対して最も親近性が高いといわれている (ibid: 135)。エスニック集団競合論は、人種やエスニシティを定義する場合、主義的な立場を採用し、感情表出的存在集団としてのエスニック集団と考えがちな原初的特性重視論に反対して、利益表出的で目的および機能集団としてエスニック集団をみなし、その道具的性格を強調するという (ibid: 135)。関根の整理によるとこれら二つの学説は、第一に、心理・生物学的な学説と異なり、エスニシティの主観的・合理的側面を強調していること、第二に、古典的マルクス主義研究と異なり、人種・エスニシティへのこだわりは、資本家階級の操作による虚偽イデオロギーであるとネガティブに見るよりは、従属的な地位から脱出するために積極的に利用すべきものとみる点、第三に、文化的分業や国内植民地状況の形成に関して、ほぼ一致した見解を示しているという (ibid: 146)⁵。

本節で紹介する「エスニック間競争モデル⁶」は、自分たちの文化的特性やネットワークを活用し、他のエスニック集団との競争を勝ち抜こうとする移民エスニックの姿を描写する目的を持って提唱されたものであるが、その立場は上記の二つのモデルを掛け合わせ、さらには白人-黒人という二つの人種間に限らず、異なるエスニック・マイノリティ集団間の関係を考察する上で出てきたものといえるだろう。

このエスニック間競争モデルが現れた背景として、1970年代の、異なるエスニック集団間における一触即発もいえるような状況がある。70年代の状況とは、黒人、白人、ラティーノ・ヒスパニック、その他の少数エスニック集団⁷が互いに争って、職業、治安、信望、居住スペース、政府の保護を奪いあうような状況である (Edsall and Edsall 1995: 167)。その要因とは、週給が下がり労働者階級の雇用市場が縮小したため、政府が少数エスニック集団の雇用促進を目指して介入を強化したことが一つある。さらには移民政策の変更で、多数のラティーノとアジア系の移民に合法的な就職活動を行う機会が与えられたほか、メキシコとの間にある国境を越えてくる不法入国者が増加したこともある。同時に、それまで公民権運動を擁護してきた弁護士や活動家が、こんどはそれまで社会から締め出されていた階層の権利を拡大することに焦点を当てるようになったことも挙げられるという (ibid: 167)。

また、エスニック集団間における緊張の高まりの要因としては、ニューヨークやロサンゼルスのような移民が集中する「多民族都市」に、移民自らが経営する店舗・小工場・事務所などが集まっているということが大きいと考えられる。「様々な動機を抱いてアメリカへ渡った移民の中には、自らのライフチャンスを拡大するために、制限的な労働者職ではなく、自営業やスモールビジネスに従事する者も少なくなく (く)」(南川 2002: 45)、異なるエスニック集団に帰属するものの中で雇用者側と労働者という立場の違いが生まれることは容易に想像されるだろう。こうしたエスニック・ビジネスは、個々の移民

のライフプランに依拠した経済活動であるが、特定の地域に集中すれば、他の移民エスニック集団との競争や、調和・祖語などの社会的課題は避けられないだろう。この節で紹介するエスニック間競争モデルとは、以上のように、経済的観点から、市場でのエスニック間関係を考察する理論モデルだということができるだろう。

こうした競争に着目するモデルは、必然的にエスニック集団内での序列階層について関心を持つことは明確であろう。このモデルでは、人種・エスニックを基に分節化された集団間で行われる経済的競争に注目し、異なるエスニック集団の社会的・経済的地位が考察される。そして集団内における行動や態度にのみ注目するのではなく、社会的地位の違いにも言及し、集団同士の接触到付随して起こる現象を読み解こうとする。こうした見方は「人種ヒエラルキー (racial hierarchy)」モデルとも呼ばれている (C. Kim and T. Lee 2001: 633)。

エスニック間競争モデルでは、このように、消費社会的な経済的な成功の形が提示され、そうした成功を、競争関係の中で対立しながら競い、勝ち取ろうと努力するエスニック集団が分析されるのである。そして、アメリカ社会において経済的な成功を収めるということは、自身のエスニックコミュニティ内での成功を基礎として、その後、ホスト主流社会にまで事業を展開することを指しており、最終的な目的としての「アメリカンドリーム」は、一エスニック・マイノリティとしての成功というよりはむしろ、一アメリカ市民としての消費社会的な成功を指しているものと考えられる。

ところで、競争モデルから想定される序列階層は、アジア系の人々にユニークな位置を与えてきた。それは、「緩衝ゾーン (buffer zone)」といった、白人と黒人の間の位置である (E. Kim 1997)。Mari Matsudaの言葉を借りるならば「エスニック・ブルジョワジー (racial bourgeoisie) というような、いわば「ミドルマン (middle man)」としての立場である (Matsuda 1993)。つまり、アジア系アメリカ人は、何人かの研究者が「アメリカ社会での地位を考えると実質的には白人ともいえる」と主張するのに反して、人種ヒエラルキーの中で白人と黒人を両端にしたその間という特異な位置を埋めているものと考えられる。こうしたアジア系の微妙な位置どりに注目する論者に共通していることは、アジア系の人々の経験というものは白人のそれとも黒人のそれとも異なっており、重要なのは白人—黒人間の関係によってアジア系の経験が条件づけられているということであるという (C. Kim and T. Lee 2001: 633)。こうした議論は、そもそもアジア系に注目した人種差別に関する研究が少ない中、示唆に富むものだといえよう。このような議論の発展により、それまで単純な白人—黒人間における競争の結果と反発の結果と考えられてきた反感情にとどまらない複雑な図式が理解されるようになった。

2. マイノリティ闘争の新たな始まりと研究の課題

いわば「第三の立場」としてのアジア系の人々の位置づけは、それ自体が社会的構築物である人種・エスニックという枠組みと、こちらも社会的構築物である表象により支えられているのである。構築物である人種・エスニックという枠組みで分節化される集団は、その集団的差異性をあらゆる文脈において強調される。こうした差異性の強調は、人種・エスニック集団に対する表象を通して行われているといえよう。このような視点に立った研究として、モデル・マイノリティ理論 (model minority theory) がある。この理論によると、1960年代、アジア系の人々は「優秀な」集団として一般的にみなされ、「模範的」なマイノリティ集団として新たに「モデル・マイノリティ」という表象を与えられた。このモデル・マイノリティという表象はアメリカ社会においては広く世論に広まっており、学問的分析対象とし

でも使用され、エスニック・スタディーズの領域においてこれまで多くの研究が提出されている。

新保守主義的言説により伝統的家族形態を維持しているとみなされたアジア系の人々は、家庭の安定や儒教的な教義の引き継ぎにより、着実に努力を重ね社会的上昇を可能とするとされた⁸。80年代に入ると、アジア系の人々は、アメリカ白人中流階級を含めすべてが目指すべき「優秀な」「モデル」として表象されるに至る。アメリカ経済が、大規模な工業生産からフレキシブルな蓄積へとシフトしグローバルな資本と労働の再分配が起こるなか、新たな階級、人種、ナショナル・アイデンティティの危機がもたらされたが、このような現代の危機のなかで、アジア系アメリカ時家族の「そこなわれていない」「伝統的な」姿が、生産性や蓄財、流動性のモデルとして、黒人やラティーノだけではなく、すべての、もちろん白人中流階級を含むアメリカ時にとっての手本として、奨励されるようになったのである (R. Lee 1999=2007: 13-14)。

モデル・マイノリティ表象は、アジア系アメリカ人およびアジア各国からの移民を忍耐強く、労働意欲に満ち、おとなしいと位置づけるものである。この言葉は、アジア系アメリカ人と移民とは他の少数派が見習うべき規範的マイノリティであると位置づける側面を持つともいえる。この表象の歴史であるが、まずは、1960年代後半から1980年代にかけてメディア表象として登場したことを示しておこう。「成功への公式 (Newsweek 1984)」、 「アメリカンサクセスストーリー： アジア系アメリカ人の勝利 (New Republic 1985)」、 「なぜアジア人がクラスで一番なのか (New York Time Magazine 1986)」 という記事に代表されるように、メディアの多くはアジア系アメリカ人の学校機関での成功をモデル・マイノリティという言葉とともに公衆に印象付けたということがエスニック・スタディーズの分野における先行研究により明らかにされている (Fong 2003: 73)。こうしたマス・メディア報道はアメリカの統一試験 (SAT) の点数の平均値や一流大学の入学率などを根拠にアジア系アメリカ人の成功を科学的に証明するものではあったが、ステレオタイプ化されたイメージの普及による弊害など、エスニック・スタディーズから盛んに批判が行われている。この節では、エスニック・スタディーズの領域のなかでのモデル・マイノリティ理論がいかようなものであるのかを示し、その可能性と課題について議論を進めたい。

2-1. エスニック・スタディーズによるモデル・マイノリティ表象研究

暴力や社会運動を通じて地位向上を訴える他マイノリティと対照的に、おとなしく黙々と労働者として分をわきまえた行動をとるアジア系の人々を、他のマイノリティ集団も見習うべきであるとの意味を込め、彼らは「模範的マイノリティ」と表象された (Chou and Feagin 2008)。そして、1980年代以降、裕福で学歴の高いエリートマイノリティというイメージがアジア系の人々と結びつけられるようになった。

エスニック・スタディーズからのモデル・マイノリティ表象批判は主に、「メディアは事実を単純化し報道することで個々の違いを無視している」として、モデル・マイノリティと評される人々個々の個性を強調するものである。それらの研究では、アジア系の人々の、社会的背景の違い (移民の多様性、歴史的背景) が強調され、そうした社会的背景の違いと同時に、それによってもたらされる経済的状況の違い (難民であるのか、希望移民であるのか、職を求めての移住なのかという違いなど) が丹念に描かれる。そして、アメリカにおけるアジア系の人々の同化、もしくは成功の度合いに差が表れている理由として、教育的背景 (識字率、本国での教育の程度、英語教育の有無) が挙げられ、これらの専

門的言説はそうした格差を埋めるための支援や政策を訴えるという運動先導的な側面を持つこともある。

つまり、多くのエスニック・スタディーズにおけるモデル・マイノリティ表象研究は、「誤った表象」が、移民の多様性、歴史・経済・社会的背景に注意を払わず、アジア系の人々ということで様々なエスニック集団に属するひとまとめに表象していると批判するのである。そこでは、アジア各国からの移民のアメリカにきた理由も様々であり、この違いはその準備の度合や合衆国における生活手段、生活様式に大きな多様性をもたらすということが経験的データとともに主張される。そして、移民や二世三世などや、エスニック集団ごとにおいて識字率にそもそも開きがあり、移民であれば本国での教育の程度、英語教育の有無といったことがアメリカでの学校教育における成功に大きく影響することから、こうしたアジア系の人々内部の多様性——経済・教育的背景の違い——が特に強調される。

エスニック・スタディーズによるアジア系内部の多様性の主張には、こうした「アジア系の人々はみな優秀である」との社会的イメージが一般的に普及したことへの抵抗という側面がある。たとえば、ある研究では、アジア系アメリカ人は大学進学への準備に関しても他に勝り進んでいて、より意欲的で、将来のキャリア形成への期待も高いとのイメージを、白人、アフリカ系アメリカ人、ヒスパニック系、ネイティブ・インディアンという他集団がアジア系の人々に対して抱いていることが示された (Wong et al. 1998)。そして、アフターマティブ・アクションなどの差別是正政策における優先枠に、アジア系移民およびアジア系アメリカ人が含まれない理由として、このモデル・マイノリティ神話が大きく影響しているとの批判が行われている。つまり、こうした表象は逆アフターマティブ・アクション (逆差別) といわれるようなアジア人に対する直接的な人種差別行動行使へと事態を発展させていくのである。これは、モデル・マイノリティ表象が、アジア系の人々は優秀であり、もはやマイノリティとして特別視されずともアメリカ社会において不自由なく暮らしていけるだろうとの考えが知識人の間に広がることに関係したとの指摘である。たとえば、Fongは自身の著書の中で、黒人最高裁判官候補 Clarence Thomas による以下のような発言を引用し、その点を強調している⁹。

アジア系アメリカ人は厳しい法的・社会的差別によってもたされた略奪を越えてきた。しかしながら (現代において)、彼らは主要となる教育機関でマイノリティの代表として目立ち過ぎているため、アフターマティブ・アクションの優先枠に含まれるという利益を得るべきではない (Fong 1998)。

以上のようなアジア系の人々に対する表象は、その頂点に常に白人を据える人種ヒエラルキーの中で構築されたものであるといえよう。この表象は従来の否定的人種表象とは異なり、好意的な言葉で定義づけてはいるが、あくまでも白人の支配的なまなざしのもと、人種ヒエラルキーの中で白人に次ぐ位置を与えるものにすぎないのである。

アジア系アメリカ人がモデル・マイノリティの地位へと上昇していったのも、実はアジア系アメリカ人の現実の成功とはあまり関係はなく、アフリカ系アメリカ人による同化の失敗——もっと悪く言えば、拒絶——と関係した。アジア系アメリカ人は、一つには政治的に沈黙を守ったことと、二つ目には民族集団として鈍化が可能であった点で、「黒人ではなかった」のである (R. Lee 1999=

2007: 193)。

そもそも、従来の人種・エスニック集団の関係についての先行研究では、黒人に対する白人からの差別を議論の対象として据えられてきたのであって、アジア系の人々をその分析対象の中に含め、経済的な面における競合関係を描き出したエスニック研究自体が60年代以降のアジア系研究者の一つの貢献だといえよう。そうした意味においてエスニック・スタディーズという分野におけるモデル・マイノリティ研究は評価されるだろう。

そして、モデル・マイノリティという表象およびそれがもたらす影響はエスニック・スタディーズが多く取り扱い、「モデル・マイノリティ」表象とはステレオタイプであるとし、それゆえに起こる人種差別助長の側面を具体的な事例を通して訴えてきた。エスニック・スタディーズはエスノグラフィックな研究方法を用いて、モデル・マイノリティと表象されている人々が日常で出会う差別の経験に注目し、一見するところ社会的承認を与えるかのような表象の背後に存在する、不可視化された差別を暴きだしたのである。そして一般的な、マイノリティを劣等と位置づける表象とは相反して、アジア系の人々を優秀であると表象するモデル・マイノリティ表象が、「アジア系の人々に対する差別はもはやなくなった」などというような短絡的な意見へと導くとの批判を行ってきた (Bell 1982; Nee and Sanders 1985; Tinker 1982)。R. Lee が指摘するように、それまでのエスニック間関係をめぐる研究では、主に経済的な白人対エスニック・マイノリティという競合関係に焦点があてられる中、被表象者の日常生活レベルでの差別体験など、アジア系の人々のアイデンティティにかかわる問題を取り上げた点でエスニック・スタディーズによる研究は示唆に富むものであろう。

しかしながら、モデル・マイノリティについての多くの研究は、差別の実態を暴くべく、エスニック・マイノリティ主体の経験的インタビューなどを精力的に行う一方で、そうした表象がなぜ説得力を持って社会に広がり、現在において使用され続けているのかという点について考察をするものではない。一部では、こうした理論自体がマイノリティの差異性を強調するものであり、さらに、こうした理論を用いる研究者自体がアジア系の研究者であることから「当事者による社会運動」という側面が色濃くあるとの指摘もある。

これまでの先行研究では、アジア系移民への排斥は、経済的な競合関係に直接の原因があるとし、民族ごとに分断された労働市場を創ろうとしたのだと指摘される。これらの研究は階級と人種のダイナミズムを理解し、反アジア感情が形成される経済的な分野の見取り図、フレームワークを提供してくれる。しかしながら、こうした視点からの研究では、アメリカ文化のなかでアジア人の特定の人種イメージがどのように発展し、どのような役割を担ったのかは説明されない (R. Lee 1999=2007: 6-7)。

R. Lee の指摘どおり、1節において考察されたエスニック間継承モデルやエスニック間競争モデルといった経済的なエスニック集団の闘争を前提としたアジア系アメリカ人を対象とした研究は、アジア系の人々の人種イメージ (例えば、「アジア人は優秀だ」というようなもの) が社会においてどのような働きをしたのかについては多く語るものではない。

一方で、一般的に、エスニック・スタディーズのモデル・マイノリティ表象「神話」研究——人種的

ステレオタイプ研究——は、「表象に見られる人種主義を批判的に検証する一定の役割を果たしてきた」（竹沢 2009）といわれる。好意的な表象の裏にある差別の「まなざし」を発見したのである。これらはエスノグラフィックな研究方法を用いて、不可視化された差別を暴きだした。しかしこうした、人種のステレオタイプ研究の一つである、モデル・マイノリティ理論は、モデル・マイノリティという表象には敏感でありながら、差別の実態にその関心を収斂させたばかりに、かえってそうした表象がグループ間の実際の競合関係における政治・経済的な側面ではどのように作用したのかといったことに着目するものは少なくなっていった。次節においてその理論的課題について述べることにする。

2-2. モデル・マイノリティ理論とその課題

エスニック・スタディーズの領域におけるモデル・マイノリティ表象研究は、「白人至上主義」ともいえるような人種ヒエラルキー、すなわち社会的なエスニックグループの競合関係について批判的な視点を持っていた。大河内によると、モデル・マイノリティ神話そのものが白人と非白人との間の階層構造を前提とし、それを再生産するものであるとの批判も存在するという（2006: 310）。モデル・マイノリティ神話においては、上層市民である白人と「同様」になる（あるいはなろうと努力する）ことが「望ましいマイノリティ」の姿として描かれるわけだが、それは逆に白人至上主義を強固にするという役割を果たし、差別構造を永続化させていると説明されるという（大河内 2006: 310）。従来のモデル・マイノリティ理論では、「こうした表象は事実を歪曲し、アジア人に対する一枚岩な見方をむやみに広めるものであり、修正されるべきだ」と主張される。つまりこうした表象は「神話」であるというのだ。もちろんこうした主張は重要であり、アジア系とひとくくりにまとめられる人々についての多様性を主張していくことはこれからも必要とされる。しかし、そのような主張を行う研究が数多く提出される中、「では一体表象によってどのような影響がもたらされたのか」という問いについての回答としては「被害者として苦しんでいる」以外の結論はあまり出ていないようである。

90年代以降は、エスニック・マイノリティ表象の戦略的利用を奨励するという立場からアジア系表象に注目した研究もいくつか存在した。例えば、マイノリティの社会的地位向上のために行われるエスニック集団としての地位の利用と人種間闘争という観点から、アジア系アメリカ人が訴訟裁判の考察を行ったRobles（2006）がある。Roblesによると、裁判の原告である中国系アメリカ人は、自分たちが「優秀であるアジア系」としてまなざされることによって、アフーマティブ・アクションの適用対象から排除されたと考えた。そして他のエスニック集団（白人、黒人、ラテン系）の入学を優遇する上での犠牲となり希望する学校への入学を拒否されたと訴え起こした。アフーマティブ・アクションのいわば「逆差別¹⁰」はその多くが白人訴訟を分析の対象としていたが、この研究は、アジア系の人々が起こした裁判を追ったものであった。原告であるアジア系アメリカ人たちは、自らを「アフーマティブ・アクションの被害者である」と主張し、新保守主義的言説を戦略的に活用したという視点から考察が試みられている。つまり、「優秀であるがゆえに福祉政策から排除される中国系アメリカ人」として裁判に臨んだとの考えに基づき考察は進められていた。そして、この裁判に代表されるようなアジア系の人々の運動により、「アフーマティブ・アクションはアジア系を差別する不当な政策だ」という認識が定着したのだという。もちろんそうしたアジア系の人々による運動がアフーマティブ・アクション自体に対する一般認識を変化させる力を持ちえたのは、その裁判を報道したメディアの役割が大きかったことは容易に想像されるのだが、Roblesの研究では特にメディア報道の内容や運動にかかわる

エスニック集団がいかに関報道されていたかなどといった詳細な分析が行われてはいるわけではない。

エスニック・マイノリティはエスニックであることを強調し、そうした立場を戦略的に利用することに活路を見出すべきだとしてしまうことによって、マイノリティであるという位置づけ自体が元々白人に、そしてマス・メディアという人種ヒエラルキー上位の者から付与されたものであるという表象が構築されるという暴力性に迫りきれないという危険性が指摘できよう。これらは、エスニック集団をその分析対象とするのだが、その際、そうした集団がどのように規定され、そうした集団に身を置く人々がどのようにエスニックな主体としてのアイデンティティを自覚しているかということについて問うものは少ない。

エスニック・スタディーズという分野における、モデル・マイノリティに着目するこれまでの研究の多くはエスニックと位置づけられた被表象者の能動性をあまりにも強調するものであり、表象自体の構築性・規定性という構造的差別の問題を見落としてしまうことが懸念されるのである。マイノリティ集団に対して与えられる表象は集団を普遍のものとし、個人の特性を帰属する集団に起因するものとして結びつけ、集団的特性を強調し、使用され続けてきたという点は周知のとおりである。それが歴史的な重みを持った構築物であり、マイノリティをマイノリティとして位置づけ続ける力学として捉えることが今後さらに求められる。

3. マイノリティ表象研究の今後に向けて

マイノリティ表象は歴史の中で様々な意味に接合されながら変化するものであり、形を変えながら、時にはそこに包摂する人々を拡大しながら維持されていく。こうした視点は、スチュアート・ホールが1980年代に行った、マイノリティをめぐるメディア表象研究などで鮮やかに提示されたものである¹¹。ホールは「エンコーディング／デコーディング」モデルを提示したことで有名だが、これはメディア・オーディエンスを能動的なメッセージの「読み手」とし、支配的イデオロギーに対する対抗的な主体として位置付けるカルチュラル・スタディーズのコミュニケーション論として受容されてきた (Morley, 1992; Fiske, 1987=1996; 藤田 1988)。

60年代から70年代にかけて、カルチュラル・スタディーズの祖とされるレイモンド・ウィリアムズやスチュアート・ホールによる、メディアに媒介された現代文化の言説 (分析) というコミュニケーションの批判理論の展開があった。ここでは、多様な社会的勢力が現実の定義付けを行う「場」としてのマス・メディアが語られ、分析された。ホールは認識に対する言葉の権力性に強い関心を示していた。特にそれは、言葉の組み合わせを決定すること (言説の編成) が認識に対して及ぼす影響への関心であったといえよう。論文「〈イデオロギー〉とはなにか」(Hall 1986) の中では、「実は意味づけとは、或る用語の組み合わせのなかで特定の用語の位置を決めることなのである。それぞれの用語の位置づけは、その用語が含まれる分類図式の中で占める適切な差異を明らかにする」と述べている (ibid: 218)。用語を扱うマス・メディア、すなわち人々に言葉を与え人々を描写する表象を付与するマス・メディアとは「意味づけ」を担うという点において強い権力性を有すると考えられる。そして、マス・メディアの場とは意味やアイデンティティをめぐる戦場であり、表象の意味づけをめぐる様々な勢力がポリティクスを繰り広げる場である。その場の中で、またそうして意味づけが決定したマス・メディア表象との照応関係において、人々のアイデンティティというものは構成されるという点は強調されるべきである。

「意味をめぐる闘争の場」、すなわち権力が展開される「場」としてのマス・メディアとは、「敵対しあう社会的勢力はある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取ろうとする」(Laclau 1977) というラクラウの議論に基づいてホールが提起したものである。マス・メディアは、先に述べたように、対抗的勢力がコミュニケーションを通して闘争を繰り返す「場」として考えられる。社会が言語的に構成されているという言語論的展開を経た後の表象概念をとり入れながらも、なお、主体が歴史を背負い歴史を形づくるという主体化の過程にこだわったホールの指摘は、メディア表象と人々の関係を考えるうえで示唆に富むものである。

ホールは、*Policing the Crisis: Mugging, the State, and Law and Order*の中で、若者、特にエスニック・マイノリティの若者がMugするものとして表象され、Mugging(窃盗行為)が時代のモラルパニックを象徴する存在としてメディアによって位置づけられていく過程を描き出した。こうした罪を犯すマイノリティの若者は、社会にとっての脅威であり、モラルパニックを引き起こす原因であり、排除すべきものとして理解されていったという(Hall 1978)。ホールはこうした犯罪を、決して「階級闘争に立ち向かう手段」としては評価せず、こうした日常の解釈と経験を政治戦略として読み解くことを拒否した。そして経済的な点にすべての説明を求めることも避けつつ、右派のイデオロギーに支えられて台頭するコンサバティブな党の設立と、サッチャー政権下で強まる威圧的な国家としての体制への支持の取り付けが、マイノリティのスケープゴート化によって行われていくという過程を明らかにした。

カルチュラル・スタディーズは旧来の権力分析ではとらえきれない文化における権力の作用—特に表象を分析の対象とすることで文化をめぐる力関係を把握しようという志向性を持つとされる。しかしながら、カルチュラル・スタディーズはその理論的志向性を十分にくみ取られることなくアメリカにおいて発展していったという経緯がある。社会におけるマイノリティに注目するという点において、エスニック・スタディーズと高い親和性を持つと考えられるカルチュラル・スタディーズだが、ホールの理論的志向性が十分に理解されなかったこともあり、現在のマイノリティの表象を扱ったメディア研究及の中でその理論的志向性が十分に生かされてきたとは言い難い。

マス・メディアを介して為される表象をめぐる力関係の解明を主たる分析の目的に据えるというホールの企図¹²は、マス・メディア空間を「闘争と場」として見据えた、自身の、マイノリティ集団に対するマス・メディア表象の言説分析に見ることができる。マイノリティ表象を担うマス・メディアを研究する際、表象と常に照応される形で生成されるという「社会的な主体」としてのマイノリティの姿について描き出すというホールの設定した視座の重要性は認識されることだろう。こうした視座は、アメリカにおけるエスニック・マイノリティの表象について研究する上で、より、社会により構築される「マイノリティ表象」という点について迫るものであり、ホールが使用した言説分析という手法はこうした分野こそ摂取していく意義があるといえよう。

マイノリティ表象及びそれにより集結が可能となるマイノリティ主体は被支配集団には抵抗のための政治的結集軸を用意してきたという指摘はこれまで多くなされてきた。それは構築されたものでありながらも、時代に即してその形を変えながらも維持され続けてきた。これは、表象に現れる力学への注目からもたらされたものであった。エスニック・マイノリティをめぐる表象についての実りある研究は、それを維持しようという力学の存在についての精細な考察でもあるのだ。こうした力学、すなわちそれはイデオロギー—と言い換えられるものであろうが、そうしたものに迫ることが今後のエスニック・マイノリティ研究にさらに求められるであろう。

例えばそれは、人種・エスニックという概念で分節化された集団としてのアジア系の人々に対するメディア表象の言説分析から、「優秀な」アジア系の人々という表象の創出に大きく影響しているとされる新自由主義思想が推し進めた個人化とアメリカ社会の保守化が浮かび上がってきたといった事例研究を通して行われるだろう。

表象がなぜ生まれたか—例えばモデル・マイノリティ表象の創出—について考察すること、そしてその表象が形を変えながらも人々を分節化し差異化する枠組みとしての人種・エスニシティと結びつけられながら維持されるのかという歴史的「過程」として表象を検証することが必要となってくる。こうした「過程」として、エスニック・アイデンティティに関わる表象を取り扱うことは、従来の人種・エスニック集団間関係に関する先行研究が抱えてきた問題に対する一つのアプローチとして有効だと考えられる。

ある言説が優先的に採用され、他の「読み」を退け、世論を勝ち取っていく過程を分析するというホールが具体的に示したマス・メディア表象の分析手法は、歴史的にある表象が生み出され波及し維持・強化されていくその過程を「歴史的構築物としてのマイノリティ表象」に照準したマス・メディア表象研究の展開を目指すうえで摂取すべきものであると考えられる。従来マイノリティをめぐるメディア表象についての研究が、人種主義に対する批判を強調するあまり軽視しがちであった、マイノリティ表象の「意味づけ」、をめぐって社会勢力間の言説の接合と再接合の過程という次元に改めて照準することの意義は大きい。

モデル・マイノリティ理論が明らかにしていった新保守主義の広まりといった社会的背景を視野に含んだメディア表象や、エスニック・マイノリティ同士のパイの奪い合いというような新たな状況は、まさに、ホールが目指した「闘争の場」としてメディア言説を分析するという研究によってより厳密に描かれるはずである。

おわりに

アメリカエスニック・スタディーズ研究から数多く指摘される「表象の歴史的構築性」というマイノリティ表象についての視点を言説分析に取り入れることも、その理論的發展を促すと考えられる。こうした視点は、ホール自身は十分には説明をしていない、言説編成自体歴史性—つまり言説がなぜ変化していくのか—という点について何らかの示唆を与えてくれるといえよう。今後は「闘争の場としてのメディア表象」と「歴史的構築物としてのマイノリティ表象」という二つの視座の接見するモデルの提示を目指し、具体的なマイノリティ表象研究を行うことが課題としてあげられる。

カルチュラル・スタディーズから摂取できる理論的立脚点として、スチュアート・ホールによるマイノリティ表象研究を提案しているという部分をここでもう一度強調したい。社会構造と政治的方向づけとマイノリティ表象という3つの相互に作用しあう関係を描いたホールによるサッチャー政権下における新聞の言説分析は、その重要性がアメリカにおけるエスニック・スタディーズに十分に摂取されたとは言いがたい。「モデル・マイノリティ」という表象が現代でも有効性をもちうる理由を考察する目的においては、ホールが明らかにしたような構造と表象の織り合わさった関係を分析する手法を使用する意義があるだろう。

今後の課題として、本稿では十分に行うことのできなかった、社会分析に言説分析を取り入れたスチュアート・ホールの試みを、マイノリティ表象研究の観点からの再評価を試みることがあげられるだ

ろう。具体的には、現在の主なマイノリティ表象研究の担い手であるエスニック・スタディーズの問題点を指摘し、権力がせめぎあうというカルチュラル・スタディーズの視座を、表象と主体化のプロセスについて考察する上での重要な視点として捉えなおす必要がある。

注

- ¹ 差別や不利益を被ってきたマイノリティの、職業・教育上の差別是正策、積極的な優遇処置を試みる政策。これまで差別を受けてきた少数民族や女性などのひとびとに対し、入学者や雇用の数に受け入れ枠や目標値を定めて、就学、雇用の機会を保障しようとする積極的な処置をとることを指す。
- ² 1980年代ロサンゼルスにおける移民流入の大きな波があった。80年代、メキシコや中米、アジア圏から多くの移民がやってきて、黒人の居住区へと入っていった。それに伴ってエスニック構造は急速に変化した。たとえば、1980年時点でのロサンゼルスの人種・エスニック構成は、ラテン系が28%、白人が48%であったという。1990年にはラテン系が40%を占め、白人が37%となった。さらに、この間にアフリカ系アメリカ人が市内人口を占める割合は17%から13%へと低下し、アジア人の割合が7%から13%へと増加した (Webster 1992: 36)。
- ³ 南川は、継承 (succession) を意識し「成功モデル」としている (南川 2002: 47)
- ⁴ 同化主義について詳しくは関根 (2002) を参照のこと。
- ⁵ それぞれの学説にしては関根 1994 (2002) の pp. 119-152 を参照のこと。
- ⁶ このモデルの名称は本論文執筆者によるもので、特に定訳があるというわけではない。
- ⁷ 本文中では少数民族と記載されている (訳一部改定)。
- ⁸ この新保守主義言説とは、Fongによると、「すべての集団は平等の機会に恵まれ、いずれはアメリカの本流へと受け入れられる」ということを当然のことと決めてかかるものであるという (1998: 162)。これは、失業や貧困といったあるエスニック集団多くみられる状況は、個人の努力によって乗り越えられるとする。成功に向かうような特性の欠如と進取の精神が欠けていることによって、貧困などは生み出されているとする。アジア系アメリカ人は、「努力を怠らず自力で成功をつかんだエスニック集団」として、こうした同化論的な新保守主義の観点からアメリカ社会において高い位置づけを与えられたと考えるのがモデル・マイノリティモデルの特徴である。
新保守主義的言説とアメリカ合衆国におけるアジア系の人々に対する表象については、拙著 (新嶋 2011 「アジア系アメリカ人表象にみる新保守主義: モデル・マイノリティ表象をめぐる」) を参照のこと。
- ⁹ Senate Judiciary Committee, "Capitol Hill Hearings," September 20, 1991. (Fong 1998) (訳は引用者によるもの)。
- ¹⁰ 「結果の平等」を実質的に保障しようとするアファーマティブ・アクションをめぐるのは賛否両論が激しく対立している。これは、一部のマイノリティ集団の就学率の低さなど「結果の不平等」は、教育を受ける前から人種間・階層間に存在していた背景とそれに起因する能力の不平等からの帰結であり、不平等を事前に是正するアファーマティブ・アクションなどの施策を導入していくには、「教育の機会平等」の概念を「実効性のある機会の平等 (effective quality of opportunity)」として操作的に定義しておくことが必要であったことに関係している。この概念規定に従うと、結果において実効性に欠けていれば、「教育の機会平等」が保障されたことにはならないとされる (宮寺 2006: 84)。そして教育の分野では、「結果の平等」まで求める平等主義 (egalitarianism) にたいして、技術的な実効性ばかりでなく道徳的な正当性についても、疑いが出されているという (ibid: 81)。これらは、個人の能力や志望の多様性を配慮しないのは悪平等ではないか、格差を埋めようとするあまり、当人の努力不足に責任をとらせていかなければモラル・ハザードを招きはしないか、などという疑いである。そのため、アファーマティブ・アクションはその有効性を常に取りざたされ、開始された当初から批判を受けてきた。そして、黒人、ラティーノ、ネイティブ・アメリカンの人々を対象に優遇的に入学を認めようとする大学などの試みは、白人の入学する権利を侵害するものだという訴えが起こされてきた。ここでいわれる権利侵害とは、いくつかのエリート大学が、「入学許可者の定員について人種を基準として枠を設け、白人志願者の入学を不当に制限している」との異議申し立てに基づいてのものであり、こうした事態はアファーマティブ・アクションの問題点として「逆差別」と呼ばれている。
- ¹¹ 詳しくは拙著「マス・メディア表象研究におけるカルチュラル・スタディーズの意義

— スチュアート・ホルの文化的アイデンティティ理論をてがかりに一」(2014)を参照のこと。

¹² 「マギング」の研究など (Hall 1978)

【参考文献】

- Bell, A. Daniel, 1982, "The Triumph of Asian-Americans," *New Republic*, July 15: 24-31.
- Chang, T. Edward, 1994, "America's First Multiethnic 'Riots.'" Karin Aguilar-San Juan ed., *The State of Asian America: Activism and Resistance*, Boston: South End Press: 101-108.
- Chang, R., 2000, *Why we need a critical Asian American legal studies*. J. Wu & M. Chou, S. Rosalind and Joe R. Feagin. 2008, *The Myth of the Model Minority: Asian Americans Facing Racism*, Paradigm.
- Davis, 1993 "Who Killed L.A? Part Two: The Verdict Is Given." *New Left Review* 199: 29-54.
- Duncan, O. and B. Duncan, 1955. "A Methodological Analysis of Segregation Indices." *American Sociological Review* 20: 210-217.
- Edsall, B. Thomas., and Edsall, D. Mary, 1991 (1992) *Chain Reaction: The Impact of Race, Rights, and Taxes on American Politics*. W. W. Norton & Company, Inc., New York. (飛田茂雄訳, 『争うアメリカ人種・権利・税金』1995, みすず書房)
- Espenshade, and Chung, 2005 (<http://www.princeton.edu/~tje/files/Opportunity%20Cost%20of%20Admission%20Preferences%20Espenshade%20Chung%20June%202005.pdf>). 2014, Apr. 27.
- Fiske, J., 1987. *Television Culture*, Verso. (伊藤守他訳, 『テレビジョンカルチャー』梓 1996, 出版社)
- Fong, Timothy. P., 1998, *The Contemporary Asian American experience: beyond the model minority myth*, Prince-Hall Inc. New Jersey.
- 2003, *Ethnic Studies Research: Approaches and Perspectives*. Walnut. Creek, California.
- Glazer, N., 1975, *Affirmative Discrimination: Ethnic Inequality and Public Policy* Cambridge, Mass. Harvard University Press.
- and Moynihan, D. P. 1963, *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City*, Cambridge, Mass: MIT Press. (安部齊・飯野正子訳, 『人種のるつぽを越えて』1986, 南雲堂)
- and Moynihan, D. P. eds. 1975, *Ethnicity: Theory and Experience*, Cambridge, Mass: MIT Press. (内山秀夫訳, 『民族とアイデンティティ』1984, 三嶺書房)
- Hall, Stuart., Charles Critcher, Tony Jefferson, John Clarke and Brian Roberts, 1978, *Policing the Crisis: Mugging, the State and Law and Order*. London: Macmillan
- Hall, Stuart et al. eds., 1980a, *Culture, Media, Language: Working Paper in Cultural Studies, 1972-1979*. Routledge.
- 1980b, Hall et al., *Recent developments in theories of language and ideology: a critical note*.
- 1982, "The discovery of 'ideology': Return of repressed in media studies," in M. Gurevith, T. Bennett, J. Curran, and J. Woollacott, (eds.), *Culture, society and the Media*, Methuen. (藤田真文訳「〈イデオロギー〉の再発見: メディア研究における抑圧されたものの復活」谷藤悦史 大石裕編『リーディングス 政治コミュニケーション』一藝社 2002 215-248頁)
- 1989, "The Meaning of New Times," *New Times*(訳葛西弘隆 スチュアート・ホール「『新時代』の意味」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 66-79頁)
- 1990, "Cultural Identity and Diaspora" *Identity, Community, Culture Difference*, pp. 252-60. (小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 90-103頁)
- 1992, "New Ethnicities" Donald, J. & Rattanti, A. "Race." *Culture and Difference*, Sage, pp. 252-60. (大熊高明訳, 「ニュー・エスニシティズ」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 80-89頁)
- 1996, "On Postmodernism and Articulation: an Interview with Stuart Hall." ed. Grossberg, pp. 45-60. (甲斐聰訳「ポスト・モダニズムと節合について」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 22-43頁)
- Hall, S. (ed.) 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage, Publication.
- 貴堂嘉之 1996 「書評竹沢泰子著『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷—』」『東京大学

- 『アメリカン・スタディーズ』東京大学出版会 Vol.1: 126-128
- Kim, Elaine, 1997, "Korean Americans in U.S. Race Relations: Some Considerations", *Amerasia* 23(2), pp. 69-78.
- Kim, Jean Claire and Taeku Lee, 2001, "Interracial Politics: Asian Americans and Other Communities of Color", *Political Science and Politics*, Vol. 34, No. 3, pp. 631-637.
- 桑野真紀 2007 「〈チカーノ/スタディーズ〉をめぐる論争: 〈ヨーロッパ中心主義〉に抗して」〈http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/16034/1/070cnerDP_020.pdf/〉.
- Laclau, E., 1977, *Politics and Ideology in Marxist Theory*, NLB (横越英一監訳, 『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』1985, 拓植書房)
- Lee, G. Robert, 1999, *Orientalisms: Asian Americans in Popular Culture*. Temple University Press, Philadelphia (貴堂嘉之訳, 『オリエンタルズ—大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』2007, 岩波書店)
- Lee, A. Barret and Wood, B. Peter, 1991. "Is Neighborhood Racial Succession Place-Specific?" *Demography*, Vol. 28, No. 1, Feb.
- Light, I. H., 1972, *Ethnic Enterprise in America: Business and Welfare among Chinese, Japanese, and Blacks*. University of California Press.
- Matsuda, Mari, 1993. "We Will Not Be Used", *UCLA Asian American Pacific Islands Law Journal* 1, pp. 79-84.
- Min, Pyong Gap, 1996, *Caught in the Middle: Korean Communities in New York and Los Angeles*, Berkeley: University of California Press.
- 南川文理 2002 「アメリカの人種エスニック編成とアジア系移民—「エスニック・ビジネス再考」宮島喬, 梶田孝道 編『国際社会4 マイノリティと社会構造』東京大学出版: 45-66
- 2003 「エスニック・スタディーズ」の誕生: アメリカにおけるエスニシティ論の歴史的な文脈」関東社会学会第51回大会 〈http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points_section12.html〉
- 2004 「アメリカ社会における人種エスニック編成—エスニシティのナショナルな条件」『社会学評論』第55巻第1号
- Morley, D., 1998, "So-Called Cultural Studies: Dead Ends and Reinvented Wheels." *Cultural Studies*, Vol. 12, pp. 476-97.
- 村上由見, 1997, 『アジア系アメリカ人—アメリカの新しい顔』中公新書.
- Nee, V. and J. Sanders, 1985. "The Road to Parity: Determinants of the Socioeconomic Achievements of Asian-Americans," *Ethnic and Racial Studies* 8: 75-93.
- 新嶋良恵 2011 「アジア系アメリカ人表象にみる新保守主義—モデル・マイノリティ表象をめぐる—」『慶應義塾大学大学院研究科紀要』第72号 1-18頁
- 2014 「マス・メディア表象研究におけるカルチュラル・スタディーズの意義—スチュアート・ホルの文化的アイデンティティ理論をてがかりに—」『メディア・コミュニケーション研究所紀要』慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所, 第64号
- Omi, Michael and Howard Winant, 1994, *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1990s*. Routledge. New York.
- 大河内美紀 2006 「マイノリティ問題の新局面—カリフォルニア州憲法修正提案209号をめぐる議論を素材に—」名古屋大学法政論集213号, 93-334頁
- Portes, A. and R. Bach, 1985, *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*, University of California Press.
- Robles, Rowena, 2006, *Asian Americans and the Shifting Politics of Race: the Dismantling of Affirmative Action at Elite Public High School*. London, Routledge.
- 佐藤恵 1994 「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」『ソシオロギス』18, 79-93頁
- 関根政美 2002 『エスニシティの政治社会学—民族紛争の制度化のために—』名古屋大学出版
- 2003 「関東社会学会第51回大会報告概要」〈http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points_section12.html〉
- Shohat, Ella and Robert Stam, 1994. *Unthinking Eurocentrism and the Media*, London: Routledge.
- Shohat, Ella, 2008 "Stereo-type, Representation and the Question of the Real: Some Methodological Propo-

- als.” Paper presented at the 12th Kyoto University Symposium Transforming Racial Images: Analyses from Representation. Dec 5th, at Kyoto University.
- Takagi, Dana, 1990, “From Discrimination to Affirmative Action: Facts in Asian American Admissions Controversy.” *Social Problems* 37, pp. 578-592. (「差別から積極的是正策へ」, 『構築主義の社会学—論争と議論のエスノグラフィー』平英美, 中川伸俊, 工藤宏司訳, 世界思想社.)
- 竹沢泰子 2005 「総論」竹沢泰子編 『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』人文書院 13-109頁。
——— 編 2009 『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店
- Tinker, J. N., 1982, “Intermarriage and Assimilation in a Plural Society: Japanese Americans in the United States,” *Marriage and Family Review* 5: 61-74.
- Webster, William. H., 1992 “The City in Crisis: A Report by the Special Advisor to the Police Commissioners on the Civil Disorder in Los Angeles” Los Angeles, CA. Special Advisor Study [601] South Figueroa Street, Suite 3425, Los Angeles CA. 90017.